

たまねぎ通信

FEBRUARY, 2008

No.
004



仲良し

[写 真] 小泉 茂樹 (伏古10条クリニック院長)

特集

ホスピスケア (緩和ケア)



勤医協中央病院院長 伊古田 俊夫

新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

昨年は、長年の課題であったホスピスケア病棟をオープンすることができました。多くの病院から患者さんの紹介をいただき、順調に運営されています。また地域FM局さっぽろ村ラジオ (81.3MHz) にレギュラー番組「健康と医療の広場」を開設いたしました。私ども病院と市民の距離が少し縮んだのではないかと考えています。

今年も地域医療に役立つ様々なことに挑戦したいと考えております。同時に医療費を含む社会保障費を削減しつつける自民・公明両党による政府の横暴としっかりと闘う活動にも力をいれたいと考えるものです。どうぞよろしくお願いいたします。

ホスピスケア

(緩和ケア)

東区初のホスピスケア病棟を開設して —勤医協中央病院のめざすホスピス・緩和ケア—

緩和ケア診療部長
小林 良裕

2007年10月1日に、東区、北区初となるホスピス・緩和ケア病棟を開設しました。幸いにも市内の多くの病院、診療所から入院また緩和ケア外来にたくさんの患者さんのご紹介をいただいております。この場をお借りして心から感謝を申し上げます。病棟の実際は加藤看護師長(ホスピスケア認定看護師)にお願いし、ここでは改めて緩和ケアについて、そして私たちの病棟がめざすそのあり方について少し述べさせていただきます。



において病者や死にゆく者になされてきた手厚いケアに加えて、症状緩和のための最新の科学的、医学的技術が応用されたということの意味を意図しています。ソングダースは既に1950年代から、たとえばがん性疼痛に対してそれまで大勢を占めていた疼痛時のモルヒネ屯用という方法を否定し、モルヒネの定時投与という方法を用いて画期的な成果をあげました。これはモルヒネの薬理学あるいは動態薬理的な検討と臨床的な経験から生まれた投与方法でした。その他のさまざまな身体症状に対しても新しい薬物治療が導入され、次々と新しい知見が生まれるに至りました。こうしたホスピスケアはヨーロッパ、北米、オーストラリアに急速に普及しました。この時カナダでは特にフランス語圏において、ホスピスという言葉が知的障害者の施設を表す語として用いられていたため、誤解を避ける意味でホスピスを「緩和ケア病棟(Palliative Care Unit)」と称するようになりました。ですからホスピスケアも緩和ケアも基本的には同義語ということができます。

1986年世界保健機関(WHO)は『Cancer Pain Relief(がんの痛みからの解放)』を発表し、いわゆるWHO3段階ラダーと呼ばれる標準的な疼痛緩和のプロトコールを提示しましたが、これに最も大きな影響を与えたのはソングダースたちの実践および研究でした。イギリスでは早くから緩和ケアが医学教育に導入され、多くの教授も生まれるに至っています(日本では昨年ようやく大阪大学医学部大学院に緩和医療学の教授が生まれました)。

こうしたホスピス・緩和ケアはその精神において勤医協、民医連が主張する患者さんに対する「親切で良い医療」、「無差別・平等の医療」と深くつながっていると私は考えています。以下に当院ホスピスケア病棟の理念をご紹介します。



現在ホスピス・緩和ケア病棟は札幌市内に6施設、道内に10施設あり、全国的には2007年10月現在で177施設が運営されています。「ホスピス(hospice)」という言葉は中世ヨーロッパで旅人や巡礼者、病人に食事とベッドを提供した教会や修道院に付属した施設に由来します。この語源となったラテン語のhospitiumには「人をおもてなしする」という意味があり、この語からhost(客をもてなす人)、hospitality(おもてなし)、さらには病院を意味するhospitalが派生しました。このことは本来病院とはどのような場所なのかを考える上で大切なことを教えていると思います。さらに近代に入り19世紀の 아일랜드で、結核やがんなど当時不治とされた病に倒れた人々に、修道女たちが手厚いケアを提供し看取った施設が生まれました。これらは中世に倣ってホスピスと呼ばれました。このホスピスがイギリスその他にも広がっていきました。しかし私たちが規範とする現代的な

意味でのホスピスは1967年、ロンドンに開設されたセントクリストファー・ホスピスとその創設者シシリー・ソングダース医師に溯ります。

この「現代的」とはそれまでホスピスに



小林 良裕

北星学園女子中学・高等学校教諭、同大学非常勤講師を経て、東海大学医学部に社会人編入。2000年、内科研修医として北海道勤医協入職。2003年、札幌南青洲病院緩和ケア科入職、同院ホスピス立ち上げに参加。2005年オーストラリア・フランクストン市立病院ホスピスで研修。2007年4月より現職。趣味は旅行ですが、悲しいかな医者になってからはなかなか海外までは行けないです。オーストラリアでは普通の勤務医が3週間、4週間(!)の長期休暇を楽しんでいました。日本の事情を話すと「まったくあり得ない」と大いに同情されました。国、厚労省は医師、看護師を増やせ!

病棟開設3ヶ月を経て —看護の立場から—

ホスピスケア病棟看護師長
加藤 真由美(緩和ケア認定看護師)

当院ホスピスケア病棟は10月1日開設し、開設以来多くの医療機関から患者様のご紹介をいただき、3ヶ月を無事経過することができました。本当にありがとうございます。当病棟の病床数は18床で、看護師17名、ソーシャルワーカー2名、薬剤師2名、栄養士1名、OT2名、PT2名、ST2名がチームとなり患者様のサポートをさせていただいています。

患者様の多くは、辛い治療を耐えて来られ非常にお疲れの状態でご入棟される方がほとんどです。「やっと居場所が見つかった」「もっと早くここに来たらよかった」などの感想を言っていただくことがあり、私たちとしても大変励みになっております。

一方で、お身体のつらさや精神的苦痛など様々な苦痛を抱えて入棟される方も多く「早く逝きたい、楽にさせてほしい」と話されるかたもいます。しかしつらい症状を和らげ、その方が大好きな入浴を安



楽に入れるための工夫を重ね、実現できた時「生き返ったようだ、この前はあんなに死にたいって言ってたのにおかしいね」と言っていただきました。それぞれの終末期に訪れる相反する気持ちを受け止め、できる限り寄り添いながら過していただくお手伝いをさせていただき、その方の「生きる力」に働きかけるようなケアを充実させていくのが、ホスピスケア病棟であると思っています。

当病棟のパンフレットには、「わたしらしく生きたい」と書かれてあります。病気だからといって何かをあきらめてしまうのではなく、ご自分がその瞬間を幸せと感じられるよう、ホスピスケア病棟ではむしろ積極的に、私らしくあるためにできることやりたいことを積み重ねていっていただきたい。わたしたちは症状緩和を積極的に行いながら、そのサポートをさせていただく事が、当病棟での役割であると考えております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



ボランティアのみなさん

問合せ先

ホスピスケア病棟に関するお問い合わせは下記をお願いいたします。

医療福祉課 011-782-4660(直通)

(平日 9:00~17:00)

なお、ホスピスケア病棟(緩和ケア診療部)では随時、医師・看護師・その他の職種の皆さまの研修を受け付けております。



加藤 真由美
(緩和ケア認定看護師)

1993年 勤医協看護専門学校卒業 同年
北海道勤医協入職 中央病院勤務
1993年~2005年 外科病棟、消化器科
病棟勤務
2006年7月 日本看護協会認定緩和ケア
認定看護師取得
2007年10月より現職
趣味は読書、スキー

勤医協中央病院ホスピスケア(緩和ケア)病棟理念

1. がんに伴う様々な苦痛に直面している患者さん、ご家族の「生命(いのち)の質」(QOL)の維持・向上に努め、希望を支えつつ、より良き生を送ることができるよう援助をいたします。
2. 患者さんの身体的、精神的、社会的、スピリチュアル(霊的、実存的)な全人的苦痛の緩和を図り、全ての病期において患者さん、ご家族の人間性と尊厳を守ります。
3. 医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、作業療法士、理学療法士、栄養士、ボランティアなどの専門的な多職種によるチームアプローチを重視し、民主的集団医療の下で最善のケアの実現に努めます。
4. 地域他機関との協力、連携を深め、地域におけるホスピス・緩和ケアの普及に力を尽くします。
5. ホスピスケア病棟を多職種が学ぶ研修施設として、教育・研究活動を重視します。
6. 「尊厳をもって死を迎える権利および終末期にあっても可能な支援を最大限受ける権利」(当院患者の権利に関する宣言より)を大切に、無差別・平等の医療とホスピスケアが実現される社会を目指して、多くの方々と力を合わせていきます。

シリーズ検査紹介

内視鏡検査室

内視鏡に関係する分野は当院がもっとも得意とするところ。設備も最新の内視鏡機器を2004年に導入しています。医師は、日本消化器内視鏡学会指導医4名、専門医3名が中心になり担当しています。また3名の認定消化器内視鏡技師がおり(今年1人受験予定)、患者さんが楽に検査を受けられるよう気を配っています。

内視鏡検査は、上部内視鏡検査・下部内視鏡検査を主に施行しており、2006年度件数は上部6943件、下部2635件でした。上部は毎日午前中実施あり、予約が必要ですが、空腹で来院され希望されると特別なことがない限りほぼ全例受け付けています。下部消化管は土曜日を除く毎日施行、金曜日は午後も施行しています。前処置が必要なため予約となっています(S状結腸Fsは随時受け付けです)。2006年度は、胃癌81例・大腸癌66例、食道癌16例の発見でした。

治療内視鏡・特殊内視鏡も施行しています。早期胃癌に対する粘膜切除術(ERHSE・ESD)、大腸ポリペクトミー、食道静脈瘤硬化療法、逆行性膵胆管造影、十二指腸乳頭切開術・碎石術、内視鏡的超音波診断、などです。

今後も、患者様の要望に応えるとともに、近隣医療機関の皆様にも利用しやすくなるよう、スタッフ一同さらに努力していきます。

施設概要(内視鏡室関連)

- 日本消化器内視鏡学会認定指導施設
- 日本消化器病学会指導施設
- 日本肝臓学会認定施設



内科代田医師と検査介助中の松崎看護主任(認定技師)



検査中はフル回転の内視鏡洗浄機



清潔に保存されている内視鏡機器



大腸検査用の検査室内トイレ



受付から誘導まで大忙しの宮川事務員



開院以来の記録は全て保存

表紙の写真

仲良し

[写真] 小泉 茂樹
[撮影地] 野幌森林公園



エゾフクロウが2羽仲良く並び、時折薄目を開けますがすぐまた眠りにつきます。こうした姿が見られるのは、木の葉がなくなる冬期間のようです。日中は高い木の洞で眠り、辺りが暗くなると餌を求めて飛び立ちます。この森の規模から生息数は限られるようですが、森の主とも言えるエゾフクロウがいつまでも暮らしてゆける豊かな自然が続くことを願ってやみません。



編集後記

新しい年を迎えるのは気持ちがよい。今回はたまねぎ通信も年を越すことができたのでいつもにも増して気持ちがよい。ところで表紙のNoが三桁になっているのにお気づきでしょうか。季刊なので三桁になるのになんと25年…。継続を誓って三桁にしたがその1年がやっと過ぎた。読みやすい文章か、興味を引く内容か、宣伝ではなく役に立つ記事か、急仕立ての広報委員はこの1年、主要務をこなしながら愛されるたまねぎ通信めざして悩み続けた。当分このうれしい悩みは続くだろう。

今後もこの通信を通じて少しでも役に立てる当院の医療情報発信を続ける所存です。「偽」ではなく本物の信頼される医療と情報の提供を！まずは二桁をめざします、どうぞご期待ください。(K)

